

# 教育研究業績書

2017年10月20日

所属：英語文化学科

資格：准教授

氏名：松原 陽子

研究分野	研究内容のキーワード
アメリカ文学	ウィリアム・フォークナー、現代エスニック文学
学位	最終学歴
博士（言語文化学）、修士（言語・文化学）	大阪大学大学院言語文化研究科言語文化学専攻博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 『読む力を伸ばす英文法—実践的例文を中心に—』	2013年1月朝日出版社	代表編者：玉井久之、町田哲司、Jeremy Scott Shinall、田代直也、小谷克則、山田陽子、澤田治美。例文の一部を収集し、教授用資料の一部を作成した。精読力の育成を目的に、「大学生が読むにふさわしいレベルの例文」にこだわった英文からなる文法例文集。
2. 『アメリカン・ポップカルチャー』	2010年1月朝日出版社	著者：Edward Hoffman。編者：町田哲司、井戸垣隆、柏原和子、松原陽子。 アメリカを代表するポップ・カルチャーを題材とした講読用テキストに、6章分のミニ・コラムの執筆（各400字程度）と、注釈・教授用資料の一部を作成した。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』	共	2016年2月	松籟社	編著者：金澤哲；分担執筆：相田洋明、塚田幸光、森有礼、田中敬子、梅垣昌子、松原 陽子、山本裕子、山下昇。 執筆箇所：「第二次世界大戦後のアメリカの不協和音——『墓地への侵入者』における「古き老いたるもの」の介入」（pp. 179-201） アメリカを代表する作家ウィリアム・フォークナーの作品を「老い」をキーワードとして分析した論集の一編。後期作品群の先駆けとなるIntruder in the Dust (1948) を取り上げ、作家・テキスト・時代背景それぞれの位相について、「老い」との関連から考察した。
2. 『変容するアメリカの今』	共	2015年12月	大阪教育図書	監修著者：町田哲司；編著者：柏原和子、松原陽子；分担執筆：朴育美、杉澤伶維子、魚住真司、石崎一樹、森岡裕一、坂下史子、室淳子、岸野英美。 執筆箇所：「第11章 メキシコ系アメリカ人における境界線の詩学と政治学」（pp. 155-57） 大学でアメリカについて学ぶ学生が教科書として使用することを想定し、21世紀のアメリカの現状を多角的にとらえることを目的とした論集の一編。「境界線」をキーワードに、メキシコ系アメリカ人の歴史を概観し、チカーノ文学の古典とされるBless Me, Ultima (1972) に描かれる主人公のアイデンティティ形成について論じ、現代におけるメキシコ系アメリカ人の民族的アイデンティティのあり方を問い直した。
3. 『アメリカ文学のミニマム・エッセイ』	共	2012年7月	大阪教育図書	編著者：丹羽隆昭、町田哲司、柏原和子、松原陽子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
センシャルズ』				<p>執筆箇所：第I部 第4章 「第一次世界大戦から第二次世界大戦まで」 (pp. 72-97) 第II部 10. F. Scott Fitzgerald, The Great Gatsby; 11. Ernest Hemingway, The Sun Also Rises; 12. William Faulkner, The Sound and the Fury (pp. 188-201)。 現代の若者に「アメリカ」「文学」「歴史」の魅力伝えることを主眼としたアメリカ文学史の概説書。時代思潮では主に、第一次世界大戦、ジャズ・エイジ、大恐慌、第二次世界大戦などについて概観し、文学思潮ではこの時代に開花する、モダニズム、ハーレム・ルネッサンス、南部文学、社会派小説などについて概観した。作品解説では、『ギャツビー』にみられる「アメリカン・ドリーム」のテーマ、『陽はまた昇る』に漂う「失われた世代」の虚無感、『響きと怒り』にみられるモダニズム的手法「意識の流れ」などについて解説した。</p>
4. 『アメリカ文学における老いの政治学』	共	2012年3月	松籟社	<p>編著者：金澤哲；分担執筆：里内克己、石塚則子、Mark Richardson、山本裕子、塚田幸光、丸山美知代、柏原和子、松原陽子、白川恵子。 執筆箇所：「成長と老いのより糸——サンドラ・シスネロスの『カラメロ』に見るボーダーランドの精神」 (pp. 249-71) 「若き国」アメリカにおいて「老い」がどのように描かれてきたのかを様々な角度から検証した論集の一編。チカーナ（メキシコ系アメリカ人女性）作家シスネロスの小説Caramelo (2002) を取り上げ、主人公の少女Lalaの成長に、彼女の「老い」への認識がいかに影響しているかについて、彼女の祖母との関係、また老いゆく父親との関係を通して考察した。</p>
5. 『バラク・オバマの言葉と文学——自伝が語る人種とアメリカ』	共	2011年9月	彩流社	<p>編著者：里内克己編著；分担執筆：朴珣英、松原陽子、戸田由紀子、ウェルズ恵子。 執筆箇所：第3章「人種」と「遺産」をめぐるアメリカの対話——バラク・オバマの自伝とウィリアム・フォークナーの小説」 (pp. 131-72) オバマの自伝Dreams From My Father (1995) を、「人種」をキーワードに、文学・文化・歴史の枠組みから読み解くことを試みた論集の一編。 2004年に再版された自伝の序文において、オバマがフォークナーを引用していることに着目し、フォークナーの小説Light in August (1932) およびGo Down, Moses (1942) を取り上げ、それぞれの男性主人公と自伝に描かれる「青年バラク」の姿を比較分析した。</p>
6. 『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ——』	共	2007年1月改訂増補版	英宝社	<p>編著者：森岡裕一、片淵悦久；分担執筆：吉野成美、杉田和巳、沖野泰子、小久保潤子、高橋信隆、橘幸子、坂口瑞穂、松岡信哉、松原陽子、田中沙織、隠岐尚子、森本道孝、澤邊興平 執筆箇所：II部 キーワード＜論説とテキスト＞ 5. 「イニシエーション」 (pp. 142-46) III部 データ＜文献と年表と文学賞＞1. 文献改題 (p. 222, pp. 234-36)。 アメリカ文学を読み解く上で必要な11のキーワードに関する小論文を中心に構成された概説書の中の一編。アメリカ文学を代表する著名な作家から女性作家やマイノリティ作家に至るまで、具体的な作品を紹介しながら、アメリカ文学に成長物語が多く見られるのは、「アメリカ人」という未完の自己像を作り上げようとする彼らの試みによるものであると論じた。</p>
<b>2 学位論文</b>				
1. "William Faulkner and the Agrarian Revolt: The Populist Legacy in Yoknapatawpha County" (博士論文)	単	2007年3月	大阪大学	<p>19世紀末アメリカ南部を中心に巻き起こった農民運動ポピュリズムが、20世紀の作家フォークナーの想像力に与えた影響を考察した。フォークナーの作品には強い個人主義の傾向が表れながらも、個々人が互いに経験を共有することで、いかに関係を構築していくかということに対する作家の一貫した関心がかがえる。それは、人種と階級によって深く分断された南部社会だからこそ生まれたポピュリズムの超階級的共有経験という歴史的記憶を、作家自身が受け継いでいることを暗示していると論じた。</p>
2. "'Scratching' the Southern Heritage: The Function of Narrating in Absalom, Absalom!" (修士論文)	単	1996年3月	大阪外国語大学	<p>フォークナーの小説『アブサロム、アブサロム!』(1936)における4人の語り手Miss Rosa, Mr. Compson, QuentinとShreveによる語りと、彼らの語り対象である南部の伝説的人物Thomas Sutpenとの関係を分析することで、南部文化における語りの行為の意義を考察した。語りとは、単なる過去の再現ではなく、対話によって共有された記憶の中に語り手の存</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2 学位論文</b>				
在をも刻み込むものであり、それが過去と現在の連続性を保つ時間を越えた共同体の形成を可能にすることを論じた。				
<b>3 学術論文</b>				
1. 「フォークナーの共同体像——『村』における「民衆」の概念とその表象をめぐって」	単	2005年4月	『フォークナー』第7号 松柏社 pp. 116-123	フォークナーの小説The Hamlet (1940) には、ブア・ホワイトであるSnopes一族の社会的台頭が危機感をもって描かれている一方で、彼らが住み着く共同体Frenchman's Bendの住人たちが、物語を共有することで、緩やかに連帯している様子が共感的に描かれている。そこには、共通の利害を追求する「階級」として集団化することに警戒心を示しつつも、想像の共同体によって人々が繋がる「民衆」の概念に可能性を見出そうとする作家の姿勢がうかがえると論じた。
2. 「アメリカの無垢を問う——ウィリアム・フォークナー「熊」を通して読むトニ・モリソン『ソロモンの歌』——」	単	2004年5月	『言語文化共同研究プロジェクト2003：アメリカ文化研究の可能性』 大阪大学大学院言語文化学部・大阪大学大学院言語文化研究科 pp. 19-28	黒人批評家ヘンリー・ゲイツ・ジュニアは、黒人文学固有の間テクスト性をSignifyin(g)と名付けたが、モリソンの小説Song of Solomon (1977) には、しばしば典型的なアメリカのイニシエーション物語として読まれるフォークナーの短編“The Bear” (1942) を連想させる部分がある。「放棄」を通して成長する白人青年像を逆転するかのよう、あえて「所有」することを選択することで成長する黒人男性の姿を描くことで、黒人作家モリソンが白人作家フォークナーのテクストをいかにSignifyin(g)しているか、ひいては、アメリカ神話を支える「無垢」の概念をいかに切り崩しているかについて考察した。
3. 「もう一人の「エルヴィス」を探して——アリス・ウォーカーの「1955年」と現代アメリカにおける「人種」の言説(ディスコース)——」	単	2003年4月	『言語文化共同研究プロジェクト2002：アメリカ文化研究の可能性』 大阪大学大学院言語文化学部・大阪大学大学院言語文化研究科 pp. 34-49	エルヴィス・プレスリーをめぐる現代の文化的評価は、彼が人種差別主義者であったかどうかという二元論に陥っている。その一方で、ウォーカーの短編に登場するTraynorは、明らかにエルヴィスをモデルにしているが、主人公の黒人女性Gracie Mae Stillの目を通して語られる彼の姿には、黒人文化の借用によって成功したことへの苦悩が滲み出ている。人種の政治学が陥りがちな二元論を乗り越えるには、ウォーカーのような想像力が必要であることを論じた。
4. 「フォークナーの周縁性——『行け、モーセ』における主体概念再編の萌芽——」	単	1998年3月	『言語文化学』第7号 大阪大学言語文化学会 pp. 147-59	小説Go Down, Moses (1942) の二人の登場人物に注目し、それぞれの主体形成のあり方について考察した。フォークナーが、南部の過去を清算しようとする白人男性Ikeの排他的な主体のあり方を批判的に描く一方で、南部社会の中で人種的ジェンダー的に抑圧されてきた黒人女性Mollyの発話主体の可能性を描いたところに、アメリカ史の中で周縁とされてきた南部に生まれ育った作家の複雑な主体概念の発露を見てとることができると論じた。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. 「アメリカ文学へのアプローチ——成長物語でたどるアメリカの自画像」		2016年6月18日	武庫川女子大学英文学会2016年度春季講演会	アメリカという国の「若さ」は、アメリカ文学の中心的テーマの一つである「無垢」の概念と密接に結びつき、アメリカ人の自己イメージを形成し、その神話化に貢献してきた。しかしその一方で、このイメージにはあてはまらない異なる人物像を描き出す物語も存在する。本講演では、「アメリカ人とは何者か」という建国以来の根源的問いを念頭に、「無垢」の概念に根差したアメリカの神話的自画像の成立と、時代とともにそのイメージが問い直されていく過程を、古典から現代までの代表的な成長物語を通して概観・考察した。
2. 「メキシコ系アメリカ文学でたどるチカーナ／チカーノの歩みと現在」		2016年11月14日	関西外国語大学イベロアメリカ研究センター主催2016年度連続公開講座「アメリカにおけるヒスパニックパワーの拡大」	1960年代半ばから70年代にかけて高まったメキシコ系アメリカ人の公民権運動・チカーノ運動は、現代チカーノ文学を開花させた。本講演では、その主要な作家や作品を紹介しながら、チカーナ／ノ文学に特徴的な作風やテーマを時代背景とともに概観し、チカーナ／ノというアイデンティティの形成と変容について考察した。また、ラティーノというより集合的な民族的呼称が頻繁に用いられるようになった昨今の状況から、チカーナ／ノ・アイデンティティが持ちうる意味についての再検討の必要性とともに、今後のラティーノ文学研究のあり方を展望した。
3. 「「文化を学ぶ」から「文化を問う」へ向けて——アメリカ文化史講義型授業における一取り組み」		2013年12月	関西英語英米文学会第67回全国大会 於 大阪産業大学・梅田サテライトキャンパス	シンポジウム「大学の英語教育はこれから何ができるのか(2)——英語の専門科目をどう教えるのか——」 発表者：内田真弓、松原陽子、児玉一宏。 関西外国語大学外国語学部で担当していた選択必修科目「Cultural History A (北アメリカ)」の授業実践とその課題について報告した。
<b>2. 学会発表</b>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
1. 「フォークナーの描く「失われた」戦争」		2014年12月	第58回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム 於 関西学院大学	フォーラム「第一次世界大戦とアメリカ文学——戦争、作品、作家の力学」 司会：花岡秀、講師：三杉圭子、高野泰志、上西哲雄、松原陽子。 「フォークナーは南北戦争の記憶をどのように継承し、それは彼の第一次世界大戦の描き方にどのような形で表れているか」という問い立てのもと、『兵士の報酬』（1926）と『土にまみれた旗』（1973）の二作品を読み解いた。
2. 「オバマの自伝とフォークナー小説——「人種」と「遺産」をめぐるアメリカの対話——」		2009年12月	第53回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム 於 奈良女子大学	フォーラム「バラク・オバマの自伝を読む——文学研究からのアプローチ」 司会：里内克巳、講師：朴珣英、松原陽子、戸田由紀子、ウェルズ恵子。 2004年に再版された自伝の序文において、オバマがフォークナーを引用していることに着目し、フォークナーの小説『八月の光』（1932）および『行け、モーセ』（1942）を取り上げ、オバマの自伝と比較しながら、アメリカにおける人種問題の歴史と現状について報告した。
3. 「『境界』に生きること——チカーノ／ノ文学に見る死と再生」		2009年10月	第48回日本アメリカ文学会全国大会ワークショップ 於 秋田大学	ワークショップ「記録／記憶メディアとしての文学の生と死」 代表：岡本太助、発表者：田中千晶、千葉淳平、松原陽子、岡本太助。 現代チカーノ文学を代表する作家Rudolfo Anayaの代表作Bless Me, Ultima (1972)を分析し、主流文化との衝突・折衝の中で経験する象徴的な「死」が、個人的／集団的記憶の再編であると同時に、新たな自己への再生の契機であることを報告した。
4. 「無垢と経験のはざままで——“That Evening Sun”におけるQuentinの語りをめぐる——」		2008年10月	日本アメリカ文学会関西支部10月例会 於 神戸女学院大学	フォークナーの短編「あの夕陽」（1931）に描かれる主人公の青年クエンティンのイニシエーションのあり方を分析した。南部が背負う奴隷制の過去は、南部白人に振り返るべき吉き良き幼少期さえ与えない。幼い頃から黒人差別が刻み込まれた社会に生きなければならなかった主人公が、幼少期の「無垢」を奪われ、子どもから大人へのイニシエーションを完遂できなかったことを明らかにし、南部人として生きること・成長することの困難さについて報告した。
5. 「The HamletにおけるFaulknerの「共同体」概念について」		2004年10月	日本ウィリアム・フォークナー協会第7回全国大会 於 関西学院大学	1930年代、いわゆるブア・ホホワイトと呼ばれる白人貧困層の存在が社会的関心の的となったが、そこには共感と反感という両極端な感情が存在していた。本報告では、小説『村』（1940）に描かれる白人共同体Frenchman's Bendを構成する人々の関係性を考察することで、こうした当時の時代背景が、フォークナーの思い描く共同体像にどのような影響を与えたのかについて報告した。
6. 「Snopes Trilogyにみる「民衆」の表象とその軌跡——Faulknerのモダニズムに関する一考察——」		1999年6月	日本アメリカ文学会関西支部6月例会 於 京都女子大学	旧南部支配者階級の出身であるにもかかわらず、フォークナーは創作活動のごく初期の頃から、彼とは社会的階級の異なるブア・ホホワイトを描いてきた。本発表では、作家が彼らをいかに代弁／表象（represent）してきたかということのスノーブス三部作を通して検証し、下層階級出身の彼らをとらえる作家の視点が時代の変遷とともにどのように変容していったかについて報告した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 「南部における「成長」と「老い」」		2013年5月	「フォークナーと老いの表象」2013年度第1回研究会 於 京都府立大学	2013年から3年間の予定で科研費（基盤研究(C)）の助成を受けている共同研究の研究分担者として報告を行った。フォークナーのIntruder in the Dust (1948)に登場する老黒人Lucas Beauchampを南部特有の厳格な人種差別に基づく社会制度を生き抜いた「サバイバー」としてとらえ、南部における「老い」が社会的抑圧からある種の解放の契機となりうることを報告した。
2. 『湖・その他の物語』		2010年12月	大阪教育図書	訳編者：多湖正紀、村上裕美；担当箇所共訳者：能勢卓、松原陽子、室淳子。 共訳箇所：「パタシー公園の仏殿」（pp. 53-81） 日系カナダ人作家Gerry Shikataniの短編集Lake and Other Stories (1996)の中の一編。作者の分身と思しき主人公が、ヨーロッパを舞台に、空間的・時間的移動を繰り返しながら、深いところで共感しあえる人間間のつながりの形を模索する物語を翻訳した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
3. 『アメリカ社会への多面的アプローチ』		2005年9月	大学教育出版	<p>編者：杉田米行、担当箇所執筆者：Patricia Tyler、担当箇所共訳者：松原陽子、吉野成美。 共訳箇所：第17章「アメリカ文学」（pp. 251-66）。</p> <p>国内外の様々な分野の研究者によって書き下ろされた一般読者対象のアメリカ研究入門書の中の一章。植民地時代以前からごく最近の多文化的状況に至るまでのアメリカ文学史を包括的に概観したものを翻訳した。</p>
<b>6. 研究費の取得状況</b>				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2015年4月現在	日本アメリカ文学学会会員
2. 2015年4月現在	日本ウィリアム・フォークナー協会会員（2012年4月より評議員）
3. 2000年4月4日	ミシSSIPPI州オックスフォード・ロータリークラブ例会卓話“My Hometown Kawanishi”
4. 2000年11月4日	伊丹有明ロータリークラブ例会卓話「アメリカ南部の実像を求めて——ミシSSIPPI州滞在記——」